
Blood Lily

月詠暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blood Lily

【Nコード】

N3972Z

【作者名】

月詠暁

【あらすじ】

人間の地肉を喰らう化け物・吸血鬼^{ヴァンパイア}。300年前、人間たちは彼らを粛清するため、吸血鬼の虐殺を行なった。そしてその惨劇は、ひとりの吸血鬼の復讐により、「紅の惨劇」へと変わっていく。

時は進み、六代公爵家のひとつ、フェルバルド家の長男であるノエル・フェルバルドは、塔に幽閉されているひとりの吸血鬼を見つける。少女の姿をした吸血鬼には、記憶がなかった。

そして、彼女はノエルに囁く。禁断の甘い血の契約の言葉を。

opening

街全体が紅く染まっていた。

炎と血とが混ざり合って、漆黒の夜の中を真昼のように明るく照らす。悲鳴があちらこちらから聞こえており、そして消えていった。負傷した者、もうすでに息絶えた者、まだ逃げ惑う者。

何かを叫びながら怯える彼らに迫るのは、百をも越える人の姿をした化け物だった。

女子ども容赦なく、次々と老若男女関係無しに殺戮を繰り返す彼らの目には、復讐の念が宿っていた。

そして、化け物の群生の中心には、恐ろしいその惨劇を冷酷に見下ろしている、ふたつの瞳。まだ微かに幼さの残るその瞳は涙を流しながら、けれどもまっすぐに人間たちが襲われる様を見て

不敵に、笑みをこぼしていた。

人物紹介

ノエル・フェルバルド

男 17歳 177センチ 55キロ

六代公爵家のひとつ、フェルバルド家の長男。美しい黒髪に翡翠色の目を持つ。

容姿が綺麗なため、年上からモテる。

好奇心旺盛で、スリルを味わうことが好き。時々オネエ口調だが、それはわざと。

リリー

女 外見年齢は十代半ば 155センチ 40キロ

塔に幽閉されていた記憶の無い吸血鬼。艶やかな長い黒髪に、漆黒の瞳を持つ。

性格はかなりポジティブで子どもらしい。ノエルの血を好む。

どうして幽閉されていたのか、自分が誰なのかは覚えていない。

キッシュ・フィオーネ

男 19歳 185センチ 60キロ

六代公爵家のひとつ、フィオーネ家の長男。赤毛。かなりマイペース。

ノエルの幼なじみで悪友。

両親は昔に事故で亡くなっており、かわりに祖父がフィオーネ家の当主を収めている。

ニッケ

男 外見年齢は十代後半 175センチ 50キロ

フィオーネ家で居候している吸血鬼。銀髪で眼帯をしている美青年。

どこか影を持つ青年で、キツシユの護衛係を任されている。

シエリア・シャルロット

女 15歳 145センチ 37キロ

六代公爵家のひとつ、シャルロット家の長女。金髪碧眼で人形のような容姿。

亡き母親から躰と称された虐待を受けており、左半身に火傷の痕がある。

優しい性格だが、他人に自分の心を覗かれることを嫌う。

ヴィルヘルム

男 外見年齢は二十代前半 188センチ 65キロ
シエリアと契約している吸血鬼。茶色の天然パーマで、黄金色の瞳を持つ。

数年前、瀕死のところをシエリアの血によって助けられ、その日から献身的に尽くす。

シエリアの命令によって、彼女の母親を殺害した。

用語説明

ヴァンパイア
吸血鬼

動物の血肉を喰らう化け物だが、容姿は人間となんら変わらない。純血である者と、そうでない者とに分けられる。

吸血鬼と人間の性行為は可能で、その間に生まれた子どもは半分吸血鬼の血を引いている。

驚異的な治癒能力と長い寿命が特徴。また、地位的には純血の吸血鬼が上である。

基本死なずに長い年月を生きるが、心臓を刺せば息絶える。

吸血鬼粛清法

昔、規制されていなかった吸血鬼は本能のままに人間を襲っていた。

そのため、六代公爵家が考え出した法律。

吸血鬼を殺戮しろ、というものであり、多大なる死者が出た。この法律は廃止されている。

紅の惨劇

吸血鬼粛清法に反対した吸血鬼たちが起こした、六代公爵家を襲った事件。

主犯はひとりの吸血鬼らしい。

六代公爵家

6つの公爵家からなる吸血鬼規制機関で、この公爵家らがいることで、吸血鬼と人間の均一がとれている。吸血鬼と契約している者もいる。

決して親しい愛柄といわけではなく、対立している家柄もある。

血の契約

吸血鬼と人間同士で行われる契約。これにより、吸血鬼はマスターが死ぬまで傍に付き従うことになる。

吸血鬼側にはメリットは無いが、長年の寿命の暇つぶしとして、自ら契約者を探す者もいる。

中には情が移り、献身的に尽くす吸血鬼もいる。

出会い

日曜の昼下がりは、いつも退屈だ。

某国にある深い森を抜けて、小だかい丘の上にその屋敷はあった。豪華な造りの、使用人たちが何人も働いていそうな、一目で金持ちが住んでいると分かる屋敷。

赤い高価そうな絨毯が敷き詰められた大広間を抜けて、黄金色に輝く手すりのある階段を上って右に曲がると、小さな部屋がある。

小さいと言っても、ひとりべやにしては十分な広さだ。綺麗に片付かかっている部屋の中央に、その人物はいた。

「いやはや……こつも退屈だと、参っちゃうでしょ」

漆黒の髪に、整った精悍な顔立ち。格好いいというよりは綺麗といったほうがいいかもしれない。伏せられた瞼は眠そうで、まつ毛はとても長い。

椅子に深く腰を下ろしており、両足はテーブルの上に組んでいる。手に持っていた本をそこに置き、それはそれは退屈そうに欠伸をした。

「なんか……おいしいニュースでも無いもんかねえ」

彼の名はノエル・フェルバルド。

フェルバルド家の一人息子であり、17歳という若き次期当主候

補である。いつもなら家庭教師である女教師がガミガミとうるさく勉強しろと喚くのだが、今日は用事があるとかで休暇をとっていた。予定がすっかりからになったため、退屈すぎる。

チラツと窓の外から見えたのは、幾度も続く森と、屋敷のすぐ裏に建っている塔だった。

幼い頃から両親に、あの塔だけには入ってはいけないと言われてきた。化け物がいるからと説明されていたが、きつと大罪を犯した吸血鬼でも幽閉されているのだろう。

フェルバルド家は、吸血鬼と人間の共存を望む六代公爵家のひとつだ。違法を犯した吸血鬼を粛清する役割りもになっている。

「吸血鬼……ねえ」

ノエル自身、何度か吸血鬼を目撃したことがある。しかし、彼らはきちんと理性を持っていて、とても紳士的だった。時々女性の吸血鬼から血を求められたこともあったけれど、上手く対処すればいい関係にもなる。

今や吸血鬼も人間も、同じように社会に馴染んできている。街でバツタリ彼らに会うということも、あまり珍しい話ではない。彼らが陽の照る場所に出てこれるのなら、という話にもなるが。

ノエルは、ニヤリと八重歯を見せて笑った。

いまは両親は出かけていて不在だ。頑固に怒鳴る家庭教師もいない。使用人は数人いるが、まさか自分が屋敷から抜け出そうと考えていることを思いもしないだろう。

好奇心が勝り、そつと部屋から抜け出す。幼い頃に見つけた裏口への秘密ルートをシュミレーションしながら、足音を忍ばせつつ、一階まで降りる。

幸い、使用人にも見つからず、案外楽に外へ出ることができた。

「……やっぱ、近くで見るとデケエなあ」

ノエルの前にそびえ立つ、巨大な古塔。長年誰も手入れをしていないのか、草のツルが伸び放題で、塔に絡みつくように巻かれてある。

古びた扉は既に腐っており、足で蹴倒せば簡単に開くことができた。

湿っぽい空気と、刺激臭が鼻を襲う。少ししかめっ面をしたものの、好奇心は衰えず、ノエルは中に入っていった。

すぐに石段があり、それがずっと上まで続いている。

運動がてらちようどいいと、ノエルは駆け足でそれを登っていった。

行き着いたのは、古い牢だった。鉄格子があり、どれもこれもが錆びれている。だけど、それは目を凝らさないととてもとも見えなかった。

それほど暗く、光がない。窓もないので、空気がひどく重たい。

匂いに耐えながら、手探りで壁に触れ、脆そうな箇所を見つけ、思い切り手で叩いてみた。

すると、下の扉と同じように、簡単に壁も崩れる。そこから差し込んだ光は、中の様子を鮮明に映し出した。

「……………っ」

目が、合った。

ノエルの体が硬直する。息さえもしていない。彼の眼球が捉えたのは、ボロボロの毛布にくるまっているひとりの人間だった。否、人間かどうかは分からない。もしかすると、吸血鬼かもしれない。

それは髪の毛を身長の数以上に伸ばしており、ボサボサで、腐臭が漂っていた。体も汚れており、長年風呂に入っていないことが分かる。性別も分からず、年齢も外見すら不明だった。

「……………アンタ、誰だ」

先に口を開いたのはノエルだった。

少しずつ落ち着きを取り戻し、最初にそう切り出す。口調は軽い。その手はズボンのポケットに収まっているペーパーナイフに触れていた。

毛布の人影は言葉を発せず、じっとノエルを見ている。動きもせず、ただじっと。

「人間か？ 吸血鬼か？」

その問いに、ピクリと人影が動いた。そして、

「ニンゲン…………？」

そつと言葉を吐く。そして、のそりと立ち上がった。

それに驚き、ノエルがナイフを取り出す。その際、取り出し方を少し間違え、人差し指を刃で切った。

少量の血が床に落ちる。

くんと鼻を鳴らして、人影は途端に毛布を捨てて、ノエルに向かって走り出した。いままでの気力の無さが嘘のように。

突然襲いかかってきたそれに驚愕し、ナイフを落とす。動揺し、手を振り上げて撃退しようとするが。

「……っ、へ？」

その手を掴まれ、乾いた唇に吸い寄せられる。舌を絡められ、音をたてて指をしゃぶられる。あまりの出来事に呆然とそれを見ていて、それが指をしゃぶっているのではなく、傷口から滲んだ血を舐めていることに気づいた。

「……ああ、アンタ吸血鬼か」

血の匂いが本能を刺激したのか、さうとう飢えていたのだろう。傷口を開こうと、尖った犬歯が思い切り指に食らいつく。

「ッ」

鋭い痛みが走ったが、耐えた。小さな子犬のようなそれは、体格からして少女だろうか。目が合った時に思ったが、澄んだ瞳が綺麗だった。

ノエルはそっとしゃがみ、少女の口元に自らの首筋を差し出す。

「飲め」

短くそう命令すると、少女は躊躇いもなく、鋭い歯を柔らかい皮膚に突き刺した。

喉に流れる温かさに恍惚とした表情を浮かべる。なんども吸っては噛み、噛んでは吸ってを繰り返して、気が済んだのか、ノエルから離れた。

「ちと吸いすぎだぜ、アンタ」
「……………飲めと言ったのは、きみ」

余裕が出来たのか、掠れた声ではあるが会話ができた。

「アンタ、名前は？俺はノエルっているんだけど」

「無い」

「え……………無いのか？」

「無い。正確には、覚えてない。忘れた」

そう言う彼女の瞳は、過去も未来も映していなかった。

「んー……………なら、俺がつけてやる」

「え……………？」

「安心しろ。ネーミングセンスはいいつもりだぜ。アンタ、可愛い顔してるし」

「……………か、可愛くはない……………かな」

照れたように顔をうつ伏せる吸血鬼。

ノエルはしばらく考えて、自分の好きな花の名前を思い出した。

「リリー」

そつと囁くような呼び掛けに、吸血鬼は顔を上げる。

「リリー。今日からそれがアンタの名前。わかったか？」

「リリー……………リリー……………私は、リリー……………」

白い薄い花弁。部屋にも飾ってある、とても良い香りのする花の名前。

リリーと名付けられた吸血鬼は、その花のように微笑んだ。

「ありがとう……。なら、私も……。私も、きみに贈りたい」

「ほへえ？なんだよ、熱烈なキスか？」

冗談交じりにそう言ったノエルの頬を、そつと両手で包んで。リリーが彼の唇に自らの唇を重ねる。ノエルの口内に広がったのは、鉄の味。それがリリーの血だと気づき、目を白黒させる。

「へ……」

「私は、きみとずっといる。血の契約……。でしょう。私は、これを覚えてる。これだけ覚えてる。こうすれば、きみと私は、ずっといっしょ」

ゴクリと喉をたてて血を嚥下すれば、体中が熱くなる。

吸血鬼としての本能は忘れていないらしい。血の契約をすれば、主従関係になることを、リリーはしっかりと本能から覚えていた。立ち上がり、狼狽えるノエルに跪く。

「私は、あなただけの吸血鬼だ」

戯れ

血の契約。

吸血鬼が自らの血を人間に与え、自分のものと所有権を主張するものだ。これにより、他の吸血鬼はその人間の血を飲むことができなくなる。犬などに例えれば、マーキングと同じだ。

その代わり、吸血鬼はその契約者が生涯を終えるまで、一生付き従わなければならない。

長い寿命の暇つぶしとして契約をする吸血鬼も多いと聞く。

まさか、自分自身が契約者になるなんて、思ってもみなかったが。

「おいアンタ。ちょっとコイツ風呂入れてくれ。あと、女物の服出してやれ。アンタのでもいい」

「か、かしこまりました」

屋敷に戻って、そう女中にリリーを任せ、ノエルはひとり部屋に戻った。女中は汚らしいリリーを見て目を剥いていたが、ノエルは何も言うなと睨みつける。

両親にはなんと言おうか。塔から連れてきたなどと言えば、それこそ叱咤だけではすまないかも知れない。

「ロブスターみてえに赤くなるのかねえ。いやだいやだ」

そう独り言を呟きながらも、今回の好奇心によって得ることにな

った吸血鬼の存在に心躍らせた。

吸血鬼。いままでは両親から、彼らに関わることはまだ早いと言われてきたのに。いきなり血の契約を結んだと知ったら、どう思うだろう。

昔から旺盛な好奇心は抑えることができない。子どもがやるようなイタズラはやり尽くした。そのたびに両親から大目玉を食らっていたが、今回はどんなふうにも怒られるのだろう。

もしかしたら、自分はマゾなのかもと考えを巡らせていると、ノックも無しに部屋の扉があいた。

「……………へえ」

入ってきたのは、リリーだった。

いや、詳しく言えば。みすばらしい姿はしておらず、髪の毛もボサボサではなく、肌も艶やかで汚れなどない。

見違えるほど美しくなったリリーがそこにいた。長すぎた髪の毛は少し切ったのだろうか。腰までになっている。吸血鬼の眼球にとっては明るすぎなのか、少しだけ眩しそうに目を細めた。

「いいねえ、似合ってる。綺麗だ」

「キレイ……………綺麗……………。優しい、きみ」

「きみじゃなくて、ノエルだ。俺の名前。アンタの契約者」

リリーはこくこくと頷き、

「ノエル……………ノエル……………マスターは、ノエル……………」

自分自身に言い聞かせるように呟く。

さっきまではまったく見えなかった顔がそっとノエルを見る。儂げな美しい吸血鬼だった。年齢はノエルより少し年下ほどだろうが、

吸血鬼というには、もう何十年、何百年と生きているのだろう。

けれど、記憶を無くしている彼女は、ノエルにとっては歳相応の少女と同じだった。

繰り返し呟いていた呼応が止み、リリーが顔を上げる。

「ノエル」

彼女が口にした契約者の名前。

ノエルは満足そうに笑い、彼女の手の甲に、そっと口づけをしたのだった。

「さあて。最初は、言葉の練習な。アンタ、つたないから」

「ずっと喋って……なかつたから、舌がもつれて……上手くできない」

「ずっとつてどのくらいだ？」

「……覚えてない」

正確には、忘れたのほうが正しいのだろう。彼女の欠落した記憶がどういったものなのか、どうして記憶が無いのか、色々と興味があるが本人が覚えていないのだから、仕方がない。

ノエルはそれ以上その件には触れず、何か食べたいものはあるかと尋ねた。どうせ長年塔で監禁されており、何も食べてはいなかったのだろう。

「血はもうやったけど……アンタらは普通に人間と同じものも食うんだろ」

「おなかすいた……」

「だから、何食べたい？言えよ、リリー」

「……ケーキ」

口から出た少女らしい言葉に、ノエルも吹き出した。

用意させたスイーツを平らげ、静かに寝息をたてているリリーを、優しくノエルが見下ろす。

ソファで横になったまま寝てしまったのだろう。艶やかな黒髪に指を絡ませる。見違えるほどまっすぐなその髪は、指に引っかかることなく、サラリとした感触だった。

「最高にラッキーだ」

ノエルはそう呟く。

いままで謙遜気味に見られた吸血鬼が、自分の手の中にある。無防備に寝顔を晒している。他にも吸血鬼と契約している者はいるのに、両親は絶対にそれを許さなかったのだから。

髪を指に絡ませて遊んでいると、ピクリとリリーの手首が動く。起こしてしまったのかと思ったが、そうではなかった。

ゆっくりと瞼を開き、次に上半身を起こすリリー。辺りを見渡し、途端に目付きが鋭くなる。

「どっしたよ」

「……マスターノエル。静かに」

豹変したりリーの口調に、ノエルが怪訝な表情になる。

「……同族の匂いがする」

「吸血鬼か？」

「うん……。だけど、首輪付き」

「そりゃあ、飼い主がいるってことだろうな。アンタ、そういうのわかるのか」

無言で頷き肯定の旨を伝えて、リリーがソファから立ち上がる。記憶は無くしても、本能だけは根強く残っているらしい。

「……ああ、来訪客だな。分かった」

「どういうこと……？」

「安心しなされ、お嬢ちゃん。来たのはねえ、俺の幼なじみちゃんだから」

「……なじみ？」

首を傾げるリリー。彼女の後ろで、今度もノック無しに扉が開かれる。

入ってきたのは、赤毛の長身の青年と、銀髪で眼帯をしている青年だった。

「ノエル、元気にしてたかア？」

「お久しぶり」

馴染み深い顔を見て、ノエルが若干嫌そうな顔をする。初対面であるリリーは戸惑っているが、その視線は銀髪眼帯の青年に移る。強い警戒心を伴って。

それに気づいたノエルは、彼らを指し示して紹介した。

「俺の幼なじみのキツシュ・フィオーネ。んで、こちらの銀髪さん

「がアンタの気にしてるニツク。キツシユと契約している吸血鬼ってわけ」

和みの輪

キツシュ・ファイオーネが吸血鬼であるニツクと契約したのは、今から3年前。キツシュが16歳の時だった。

単にそれは、キツシュがニツクを人間だと勘違いしていたことがきっかけらしい。

親しい友人。そうノエルに紹介されたニツクだが、その正体はノエルによってキツシュに暴かれてしまったけれど。

「今でも笑いもんだぜ。大間抜けのキツシュは、友人が吸血鬼ってことに気づいてなかったんだからな。六代公爵家のファイオーネ次期当主だとは思えねえ」

「うっせえよチビスケ。鈍感で悪かったな」

「まあ……俺も、キツシュは間抜けだと思っけど」

「ニツク……お前は本当に俺の吸血鬼か」

ニツクは面倒くさそうにキツシュを無視し、ノエルのすぐ傍にいるリリーに視線を向ける。

リリーは突然現れた彼らに動揺していたが、少しは警戒心を溶いたらしい。どこか柔らかい瞳でニツクを見返した。

「ああそうだ、ニツク。アンタ、こいつ知らねえか？アンタも数十年は生きてんだろ？こいつ、ほれ顔よく見ろって」

同じ吸血鬼のニツクなら、リリーを知っているかもしれない。微かな期待に胸を膨らませたが、ニツクはいいえと首を横に振った。

「俺、あんま吸血鬼側の人脈ないし。……その女、ノエルと契約した吸血鬼？」

「リリーって、いう……。私は、リリー」

その女、と呼ばれたことが嫌なのか、リリーが頬を膨らませてニツクにつつかかる。不意に近寄ってきた彼女に少し驚いたのか、ニツクが数歩後ろに下がった。

「へえ……。ずいぶん美しい吸血鬼じゃねえの」

「だろ？さつき連れてきたんだけどな。俺も気に入ってんのよ」

「どっから拉致ってきたよ」

「この屋敷のすぐそばの古塔」

キツシユはひどく驚いた顔をして、ノエルの得意げな顔を見た。

「お前……。やつちまったな。今度こそオヤジさんに殺されるぞ」

「リリーが守ってくれるからいいんだよ」

「うわー最悪。ていうか、あの塔にこんな美人な吸血鬼がいたなんてな。住み込んでいやがったのか？」

「……………記憶が、ねえんだよ」

切なそうに映るリリーの姿。彼女の記憶は欠けている。本能以外の、自分のことをまったく覚えていない。

「名前も俺がつけたんだ」

「そりやまた、かなり良いネーミングセンスだな。俺ならキューティーってつけるけどね」

「アンタ、絶対バカだろ」

「今更だな」

軽口を叩きながら笑い合っふたりを、じつと見るリリー。何かを
言いたそうな彼女に気づき、ニックがそっと耳元で尋ねる。

「なに嫉妬してんの」

「……ノエルは、私のなのに。私以外に笑うのは……いや、かも…
…」

「それ、独占欲っていうんだよ」

リリーは不思議そうにニックを見上げる。

純粹な子どもの目。ニックが苦手なものだった。

「どくせん……。誰かを、自分のものにしたいと……そう思うの…
…?」

「そうそう。アンタ、けっこう嫉妬深いのな」

皮肉気味に放たれた言葉の真意はリリーに通じなかった。彼女は
楽しそうに笑うノエルを見つめながら、そっとそっと、誰にも聞こ
えないように呟く。

「楽しそうに、笑わないで」

遊びに来ただけだからもう帰る。そう言い残して帰っていったキ

ツシュとニツクを見送り、自室に戻ると、リリーが自分の指を口に入れてるのが見えた。

「え、自分で自分の血イ吸ってんの？」

「ち、ちが……。っ。もっとスラスラ喋りたくて……。舌を、指で抑えて……。れ、練習……」

「じゃあ俺が付き合っっちゃっから。ほれ、口あける」

軽く顎に触れて顔を上に向かせると、リリーの赤面した顔が見えた。

「い、いいっ。ノエルにそんなこと、で、きな……。っ、うぐぐ」

「つべこべ言うなって。ほれ、声出してみ。あーって」

「あ、あーあーあー」

いったいどれほどの時間をあの塔で幽閉されていたのだろう。喋るとき舌の使い方を忘れてしまうほど、誰とも関わらず、孤独に生きてきたと思うと、胸が痛む。

指が唾液で汚れたけれど、まったく気にならない。そういえば、どうやって長い間餓死しなかったのか気になる。

「腹、すいてたる。あんなところにずっといたら」

「壁が脆くて、そこから……。崩れた穴から……。虫とか、入ってたから」

「それ食ってたのかよ」

「それしか……。なかったから」

飢えた本能はもうなんでも口に入れてしまっていたのだろう。拒否反応は無くなっていたらしく、思い出したようにリリーは渋い顔になった。その表情の変化が面白く、ノエルが和やかな表情になる。

そつとリリーの頬に触れて、コツンと額と額をくつつけた。

その行為には対した意味も無いけれど、リリーには何故かひどくそれが深い意味があるように思えた。

「明日……出かけているオヤジたちが帰ってくるんだ」

「うん」

「もしかしたら……リリーを塔に戻すよう、言われるかもしれない」
「っ」

その言葉にショックを受けたのが、顔を見てすぐに分かった。

「大丈夫。俺はアンタを手放す気、ねえから」

「……もし、私を引きずってでも、その人たちが、私を連れ戻そうとしたらどうするの？」

「家出、だな」

優しく笑う彼を見据えて、リリーは照れたように俯く。喉がひどく渴くのは、きっと、彼の血を欲しいと思ったから。

触れる体温は温かいけれど、それと同じようにリリーの顔も赤くなる。

これがどういった感情なのか、彼女自身まったく分かっていなかった。

「それに、なんで塔に入っちゃいけないのかも聞いてねえし……」

そこで気づいた。

もしリリーが塔に幽閉されているのを知って、両親が自分に塔に近づくなと言ったのなら、どうしてリリーの存在を隠す必要があったのだらうと。

長年幽閉されていた吸血鬼の少女は、こんなにも愛くるしいのに。

「どうしたの？」

「なんでもねえよ、なんでも。……ただ」

ただ、漠然とした不安が募るだけ。

「ただ、アンタを護ろうって思っただけ」

ふたりでひとつのベッドで眠った次の日の朝。

激しい扉を叩く音がうるさくて、目を開ける。朝日が射し込んできて、とても眩しい。廊下で何か物音と声がして、両親だとわかった。

気怠そうに、ノエルが上半身を起こす。すぐ隣には、吸血鬼であるリリーが熟睡していた。

寝巻きでベッドから降り、扉の鍵を開けて、血相を変えている両親と対面する。

「朝っぱからなあに。ていうか、早朝から帰ってきたんデシヨ。寝なくていいの？」

「使用人から聞いたぞ！お前、古塔から少女を連れて帰ったらしいな！」

「んあー。情報伝わるの早いなあ」

「いいから！いいからその子を早く連れてこい！」

必死な形相の父と、その傍らで真っ青になっている母。ふたりを見れば、自分のしたことがどれほどのことなのかは分かる。

けれど、ひとつだけ解せないことがある。

「ひとつ聞かせる。あの吸血鬼はどうして幽閉されてたんだよ」

「そんなこと、お前に関係はない」

「ああ？俺は次期当主だ。聞いてもいい権利つつもんがあるんじゃないか」

「親に対してその口のきき方はなんだ！いいから、あの吸血鬼を出

せ！」

「ノエル……？」

後ろから小さな声が聞こえて、ノエルが振り返る。リリーが眩しそうに目を細め、こちらを見ていた。

愛らしい、綺麗な吸血鬼。

ノエルの吸血鬼。

「そこにいたのか、吸血鬼！」

リリーに見とれていると、扉を押しやって父親が部屋に入ってきた。ノエルが服の袖を掴むが、振り払われる。

父親はリリーの腕を掴み、無理やり立たせた。

「どうせあれだけ幽閉されていたのだから、能力はもう使えないだろう」

「ちよつとアンタ！何やってんだよ」

「お前は黙ってる！この家系を潰す気か！」

「はあ？まずは俺の質問に答えるのが先決でしょうが。話逸らしてんじゃねえよ」

「この吸血鬼はなあ、お前が関わっていいものじゃない！どうしてそれが分からないんだ！」

気高いフェルバルド家当主は、息子の声を無視し、彼の胸ぐらを掴んで突き飛ばした。尻餅をついた彼を見て、リリーの瞳が鋭く赤く光る。

「お前にはいずれ説明すべきだろうが……この吸血鬼は、忌々しい我が血筋を汚すものだ！この赤い瞳を見る！大罪を犯す罪人の目だ！幽閉されるべきだった！何百年、何千年と！それを私の息子が解放してしまうとは、嘆かわしい！」

彼の言葉を聞きながら、何故かリリーの中である不安と焦りが生まれた。

その先を言っただけでほしくない。

ノエルにその先を言わないでほしい。

「だから私は反対だったのだ！さっさと殺してしまえと思っていたのに！」

「待てよ……リリーが何をしたっていうんだよ……」

「恐ろしい。おぞましい。災厄を運ぶ女だ！」

「だから、何をしたっていうんだよ！」

リリーの中で、その不安は膨らんでいく。その先を言わないでほしい。言わないでほしい。言わないで、ほしい。

「この吸血鬼はなあ、っ、あ？」

一瞬だった。

一瞬で、当主のリリーを掴んでいた手首が、床に落ちる。大量の血が滴り、赤い絨毯に黒いシミをつくった。

成り行きを見守っていた母親の叫び。女中の悲鳴。

その鉄さびの匂いの中、リリーは立っていた。

「ねえ……ノエル……」

そして、マスターであるノエルに問う。

「この男の血は、美味しいかしら」

頬に数滴の返り血を浴びながらも、リリーは平然と、ノエルに笑いかける。それがあまりにも美しい笑みで、ノエルはただただ彼女を抱きしめた。

手首から先を失い、その痛みでうずくまる当主。

「が……ッ、この……ノエル！その吸血鬼を殺せえ！」

「これは、俺の吸血鬼だ」

その言葉に、当主である彼は唇を震わせる。目尻から涙が溢れ、そして信じられないといった目でノエルを見た。

「まさか……契約したのか……？この吸血鬼と……」

「私はノエルのもの。ノエルは、私のもの」

冷たく言い放つリリーは、チラと外を見る。朝だから、能力は半減かもしれない。けれど、それだけで充分だろう。

先ほど、この男はリリーの能力は使えないと言ったが、それは違う。

彼女は契約者であるノエルの血を飲んだのだ。昨日まで衰弱していた体ではない。

「ノエル……っ、もうお前はフェルバルドの人間ではない！」

「ねえ、ノエル。ノエル……私、きみとずっといたい。だから、ねえ」

リリーが継るようにノエルに言う。その先は言わなくとも、ノエルにはもう分かっていた。

「ああ。いいよ、リリー。俺はもう、アンタ無しじゃいらねえから」

「待て、な、何を、」

言い終えるまでに、彼の首が飛ぶ。ゴトリと落ちた首は、まるでボールのように床に転がった。窓ガラスが全て割れ、その破片で廊下にあったノエルの母親と女中の首を刺す。

魔法のようなそれが、リリーの能力なのだとノエルは気づいた。触れていなくても、物を自由自在に操れる。彼女はニヤリと口角をあげ、笑っていた。

「……っ、うぶ……」

「ノエル、吐いていいよ……。ちよつと、辛かったね」

リリーに背中をさすられ、ノエルが嘔吐する。覚悟はしていたが、罪悪感とその惨状に目を向けられなくなった結果だった。床に吐瀉物を撒き散らしながら、激しく咳き込む。

リリーは下の階にも人の気配を感じとった。

「私、下に行くってくる。すぐ戻ってくるから、ノエルはここにいて

……」

「わかった……」

軽い足取りで、本能のままリリーが階段をかけ降りる。

ちょうど、朝食を運ぼうとしていた女中たちと目があった。不思議そうな彼女たちを見て、リリーは笑う。

楽しいと、思った。

「私ね、ノエルのリリーなの」

赤の音

どれくらい時間が経っただろう。

とてもゆっくりと時間は過ぎたような気もするけれど、とても速い時間が過ぎたような気もする。鉛のように重い体を起こして、ノエルが唾液を拭う。床に散らばった吐瀉物をしばらく眺め、ふと、リリーが帰ってこないことに気がついた。

床に転がっている父親の頭を一瞥し、廊下に出る。母親と女中が死んでいたが、気にも止めなかった。いま、彼が捜しているのはリリーであって、他に興味が移らない。

「……………リリー」

「ノエル？」

そつと呼んだ言葉には、返事が返ってきた。下の階からだ。

階段を急いで降りて、大広間の横の廊下を走る。ひどく血の匂いがした。そういえば、朝食を運ぶ女中たちがいないと気づく。

妙な不安と焦燥感が足を早めて、血の濃い香りを追う。

そして、一階の女中用のシャワールームに、それはあった。

「なんだ……………これ……………」

腕と、足と、顔と、胴体。バスタブにはお湯ではなく、血が張っている。そのドロリとした濃い血の中に、人間の四肢だと思われるものが見え隠れしている。

恐ろしいというよりは、奇妙な安心感があった。

女中たちがこうなっているということは、リリーは無事だということだ。

「とてもとても、汚れた」

声がして振り返る。リリーがしょんぼりとした顔で立っていた。

ノエルが昨夜渡した白い寝巻きが、返り血で赤く染まっている。汚したのだと、リリーは呟いた。

リリーの姿を見た瞬間、どうしようもない安心と、これまで放心状態で抑えられていた罪悪感と恐怖が込み上がってきた。

「リリー、屋敷内の奴ら、全員殺したのか」

「気に病まないで、ノエル。私がしたことだもの……。きみが、嘆く必要ないよ」

「いいや……ただ、ちょっとさ……泣きたいだけ。泣かねえけどな」
「私のマスターは、弱い？」

リリーの質問の返答にノエルは少しためらう。

「弱いな、本当に」

「なら、私はきみを護るよ。……これから、どうする？」

これからのことなんて考えてなかった。ノエルの表情に僅かな動揺が浮かぶ。何かを言おうと口を開くが、その唇を、リリーの白く細い指が咎めた。

「何かいる」

その言葉に、ノエルの緊張感がまた強くなる。屋敷内の人間はす

べてリリーが殺したはずだ。

しかもリリーは、「誰かいる」ではなく、「何かいる」と言った。人間ではない何かか、ということだろうか。

リリーはそつと足音を忍ばせて走る。大広間まで出て、辺りを見渡す。眩しい逆光が網膜を刺激し、忌々しそつにリリーが目を細める。

「どうして、隠れてるの。……出てきたら……いいと思うな」

見えない何かにそう言い、神経を尖らせる。何か嫌な気配がした。自分とノエル以外誰もいないはずの屋敷に、何かがいる。

集中させて耳を澄まし、何かに気がついたように、素早く後ろを振り返った。

「ッ！」

「動かないでほしいんだけどな、お嬢さん」

背後から腕を回され、何者かによって動きを拘束される。視界に映ったのは、赤いフードつきのマント。表情はよく分からないが、フードから溢れる金色の髪の毛が見えた。

声からして男性だろう。

男は持っているナイフをリリーの頬にそつと押し当てる。

「綺麗な顔に傷はつけないだろう。ああ、でも吸血鬼だから傷はすぐ治るんだっけ」

男を無視して、リリーの視線はノエルが隠れているバスルームに注がれる。

「吸血鬼のお嬢さん、きみのマスターはどこかな」

「 それを知ってどうするの」

「ここ、フェルバルド家だよ。死体を見て回ったけれど、なぜかリストにあるノエル・フェルバルドがいないんだ」

「……リスト？」

一体この男が何者なのか分からないが、明らかに味方ではないだろう。ノエルを付け狙う敵だろうか。ノエルを危険に晒すことは絶対にできない。

けれど、この男からある程度の情報は聞き出しておきたかった。

「六代公爵家のリストだよ。僕らがせっかくフェルバルド家を潰そうと思っていたのに……。まさかもう既にご息さまの手によって惨殺されていたとはねえ」

「ノエルじゃない。ノエルのせいじゃない。……私が、かつてにやっただけ」

「マスターを庇うなんて、吸血鬼のくせにえらく情が映っているね。その愛しい愛しいマスターは……。そこかな？」

男が指を指す。バスルームのある廊下だった。

リリーの表情が変わり、思いきり男の腕を噛む。犬歯はブサリツと男の腕の皮膚を刺した。

「ツ、痛」

「この血の味は不味い。……嫌いな味」

舌で血の味を確かめ、眉をしかめる。男は腕を抑えながら、

「ノエル・フェルバルドはバスルームだ。行け、ハニー」

その言葉で現れたのは、もうひとりの赤いフードマントの人間だっ

た。

素早い動きで廊下を走り、バスルームへ向かう。リリーはそれを止めようと、能力で窓ガラスを割り、首を狙って破片を突き刺そうとした。

けれど、それは失敗に終わる。

男がリリーの腹部に蹴りを決め込んできたからだ。

「か、はッ」

「吸血鬼のお嬢さん。僕らはねえ、“紅の惨劇”をもう一度試みようとしているんだ」

「……っ!？」

男の腕を見ると、敗れた服から見えている皮膚は、傷ひとつない人間では有り得ない治癒能力。

リリーは男を睨みつけ、窓ガラスの破片の雨を彼に降らせる。マントでそれを防いだ男はリリーへ襲いかかり、彼女の頭を掴んで思い切り壁に叩きつけた。

目がチカチカする。迂闊だったと、リリーは思った。

朝日が眩しい。吸血鬼にとっては耐え難い眩しさと、熱さ。力がどンドン抜けていく。

「待て、ワイマン。何かくる」

男を嗜めたのは、先ほどノエルを追ったフードの人間だった。小柄で、中性的な声。

ワイマンと呼ばれた男は怪訝そうに耳を澄まして、舌打ちをする。手をリリーの頭から放し、忌々しそうに呟いた。

「吸血鬼と人間の気配だね。契約者同士だろうなあ。……ノエル・フェルバルドは？」

「まだ殺せていない。……ただ、気絶はしている」
「よし。じゃあまずはそいつを殺してから……」

ワイマンの言葉が止んだのは、さっきまで倒れていたリリーが立ち上がったから。頭部から血を流し、ぎらつくような目でこちらを睨んでいる。

「そんなに出血していたら、マスターの血が恋しいでしょう」

確かに、今の状況だと対した能力は発揮できない。血に飢えたせいか、喉はひどく渇き、目眩までする。それを知ってか、ワイマンはそれ以上はリリーに触れなかった。

「その吸血鬼、殺さねえの？」

「殺さないよ。どうせ今ここに向かっているの、六代公爵家の奴だろう。面倒なことにならないように、今日は撤退するよ、ハニー」

「その呼び方止める、ワイマン」

「はいはい。じゃあ、ここらで退散しましょうか」

割れた窓ガラスから突風が吹く。

血の足りていないリリーの視界は霞み、いつのまにか突風の間ふたりの姿が消えていても、気付かなかった。

(ノエル……ノエル……私の、マスター……)

立ち上がり、バスルームへと続く廊下をよろめきながら歩く。傷は治っているのに、血が足りないためふらつく。

けれどリリーにとっては、ノエルの血を飲むことよりも、彼の安否が気になった。自分のことなどどうでもいい。あの塔から連れ出してくれたノエルのほうが、彼女自身にとっても大切だった。

バスルームへ行くと、数滴の血が床に付着している。香りでノエルのものなど分かった。

嫌な予感がして、バスルームのカーテンを開ける。

そこには、バスタブで倒れているノエルがいた。気絶しているらしく、眠っているようだった。

「ノエル、大丈夫……？ 私はねえ、私は……だい、じょうぶ」

思考がそこで切断される。ふつと意識が遠のいた。力がすうっと抜けるように倒れる。

倒れる瞬間、気絶しているノエルは美しいと思った。

「こんなところに人が倒れているけれど、これは……フェルバルドのご子息かしら」

「そうでしょうねえ。……にしても、こっちのレディはどちらさんでしょうか？」

「人間？それとも、吸血鬼？」

「吸血鬼です」

倒れているふたりを見下ろす、ふたつの人影。

ひとりは金髪碧眼の美少女で、黒い喪服を着込んでいる。ただ、その綺麗な顔の左半身には生々しい火傷の痕が残っていた。

ひとりは茶髪の軽く天パがかかった男で、得体の知れない笑みを

浮かべている。執事の着ているタキシードを着ていた。

「フェルバルドのご子息に、契約している吸血鬼はいないでしょう？」

「さあ。なんでこうなったのかは分からないけれど、とりあえず、私たちの屋敷に運びましょうか」

「そうですね。……どうやら、私たち以外にも先客はいたようですし」

少女の視線が、廊下に付着している血や、割れている窓ガラスなどに注がれる。ただ事ではないという事は、見ただけでわかる。

少女はふうつとため息をついて、執事に言う。

「フェルバルド家への調査を進めなさい、ヴィルヘルム」

花の名前

シェリア・シャルロットは、ある重大な罪を抱えていた。

小さな華奢な体に背負っているその罪は、決して償えるものではなく、しかし決して許されることではなかった。

シャルロット家は六代公爵家の中でも位の高い貴族だ。吸血鬼との共存を望んでおり、意欲的に彼らを受け入れる体制を設けている。また、吸血鬼に関係する犯罪を裁くのもシャルロット家に課せられている重大な任務だ。

フェルバルドの屋敷に得体の知れない何者かが襲撃するという噂を聞いたのは、偶然だった。

「行ってみて正解だったわ。まさか屋敷内に死体がゴロゴロしているなんて、思いませんでしたし」

「いやはや私も驚きましたよ。あれ、どうやったんでしょうかねえ」

声が聞こえる。かなりハッキリと。

眩しい日差しが視界に入って、今はいつでここはどこだろうと考える。ずっしりと重い頭で必死で考えて、隣で椅子に座る少女を見たときは、驚きで声が出なかった。

「あら、目を覚ましたのですね」

「どっかで会ったか？」

目を覚ましてからのノエルの第一声に、一瞬驚いた顔をしたが、すぐに穏やかな笑みにかわった。

「よく覚えていましたね。4年前の社交界での場で、一度だけ」

ノエルは頭をフル回転させて思い出す。

そうだ、この少女。

以前、六代公爵家の社交界で紹介されたことがある。

名前は、シエリア・シャルロット。金髪碧眼に、黒い喪服を着ていて、あの場では目立っていた。それでも気にしていないと、毅然とした態度だったのが印象に残っている。

今の彼女には、あの時には無かった火傷が、左顔面にあった。皮膚の色がそこだけ変わっており、赤くなっている。

「改めまして。六代公爵家のひとつシャルロット家の現当主。シエリア・シャルロットです。お気分はいかがかしら、ノエル・フェルバルドさん」

「最悪だな。……そこに眠っているのは、リリーか？」

ノエルの視線が、シエリアの後ろのベッドで寝息をたてているリリーに注がれる。

「ええ。ヴィルヘルムに手当をさせました」

「どうも、フェルバルド教。シエリア様の執事、ヴィルヘルムでございます。以後、お見知りおきを」

茶色の天パを持つ彼は、恭しくお辞儀をした。物腰の柔らかそうな笑みを絶やさないが、同時に何を考えているのか分からない、不安定さを感じさせた。

「ひどく落ち着いていますね、フェルバルド教」

「ノエルでいいよ。……なんのことかな、ヴィルヘルム」

「襲われて、知らないところで介抱されているというのに……。何も聞かない。ここはどこ？とも問わない。妙に落ち着いていて、むしろ安心さえしているようにも見えます」

「べつに安心とか、落ち着いているわけじゃないさ。……ただ」

そこで言葉を区切り、ノエルはふつと柔らかい笑みになる。

「ただ、リリーがそこにいたから……。だから、少しホツとしただけ」

「この方は、リリーさんというのですか？美しい花の名前ですね」

「自分で言うのもなんだけど、良いネーミングセンスっしょ？」

「ええ、とつても。どうして吸血鬼と契約なさっているのかは、お聞かせ願える？」

有無を言わさないシエリアの微笑みに、若干ノエルの頬がひきつる。

若きシャルロット家の当主には、フェルバルド家のご子息であれど、なかなか抵抗できるものではない。

「んー……成り行き？」

「ノエルさん、先日私たちはフェルバルド家に何者かが襲撃するという情報を掴みました。案の定、私とヴィルヘルムがフェルバルド家に出向いたとき、屋敷内の使用人たち、そして、フェルバルド家当主とそのご夫人の死体がありました。屋敷の窓ガラスは割れていて、あなたとリリーさんふたりは、バスルームで倒れていました」

(うちに何者かが襲撃ねえ……。なんでまたうちが)

「簡潔に言いましたよ、ノエルさん。私は、屋敷内の使用人やフェルバルド当主様を殺害したのは、襲撃者ではなく、あなた……いえ、リリーさんではないかと思っています」

「なんでまた？」

「あなたとリリーさんの服や、頬などについた返り血を調べました。血液は……フェルバルド家当主様のものでした」

「それがなんの証拠に？俺らの近くで敵さんがオヤジを殺して、その血を俺らが浴びたっただけじゃねえの？」

「お父上が亡くなったというのに、ずいぶんとスッキリした顔をしていらっしやいますよ。ノエルさん」

ヴィルヘルムの言葉に、少しだけノエルの表情が変わる。シエリアはそれを見逃さなかった。

「いまのノエルさんの言い方は、不可解です。まるでご自分で事実を作り上げているみたい……。嘘が下手ですね、本当に」

「俺らをどうする気？まさか公開処刑とか？」

「そんなことしないわ。だって、もしそうすると言えば、リリーさんに命令して私たちも殺すのでしょうか？無論、ヴィルヘルムで私も反撃しますけれど」

「なるべく穏便にいきたいよなあ、お互いに」

これは脅しだ。

父親殺しはリリーだとしても、命じたのはノエル自身。あの時、リリーを失うのではないかという恐怖が、罪悪感すら無くしてしまった。そしてそれは今も同じだ。

リリーのためなら、目の前にいるファルロット家当主の少女を殺害しても、別に良心の欠片も痛まない。

そんなことを平気で思っているだろうノエルを見据えて、シエリ

アは呟く。

「恐ろしい人……」

「そりゃどうも。最高の褒め言葉だ」

「まあ、でも安心してくださいな。私は別に、あなたとリリーさんを処刑だとか、そういうことを考えているわけではありません。むしろ、真逆です」

シエリアの言葉の意図が分からず、首を傾げるノエル。不敵な笑みを浮かべるヴィルヘルムは、そつと彼に囁いた。

それを聞いた瞬間、ノエルの表情が驚きのものになる。眉間に皺を寄せ、怪訝そうな顔でシエリアに視線を送る。

「本当ですよ」

「マジかよ……どうして……」

「しい」

人差し指を唇にあて、シエリアが静かにとジェスチャーする。その後ろのベッドで、むくりと上半身を起こしたのは、今まで眠っていたリリーだった。

綺麗な顔をノエルに向け、どこか眠たそうな表情で、安らかな時間終わりを告げる。

「おなか、すいた」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3972z/>

Blood Lily

2011年12月22日00時45分発行